

高大連携による「総合的な探究の時間」の取り組みについて —「SEITOKU探究」の実践—

柴沼 真，高柳賢三，青木 峻

要 旨

東京成徳大学深谷高校では、「総合的な探究の時間」の教育内容に関して、2024年度より従来実施していた内容について、大幅に変更をし、同時間に対して「SEITOKU探究」という名称を付け、地域課題解決をその内容の柱としたいいわゆるPBL型の探究として実施したが、その成果発表の内容は当初同校の教員が事前に想定をしていた以上のものとなった。

本稿はその変更にあたり、カリキュラム内容の設計者とカリキュラム内容の具体的な実施のためのマネジメントを担当した教務主任および実際の担当教員間の連携などを実施した教科担当責任者の3つの視点からその実施の理念と現実的な発生した課題等を報告するものである。

キーワード：総合的な探究の時間、地域課題解決型PBL、4 高大連携による総合的な探究の時間のカリキュラム構築、総合的な探究の時間の授業マネジメント

1. はじめに—問題の所在—

「総合的な学習の時間」は、1998・1999年告示の学習指導要領改訂で導入された。その目的としては、教科等横断的な学びや体験活動、地域との協働を通じて、児童生徒の興味・関心、自己の在り方・生き方を育むこととして挙げられている。その後、実践の広がりとともに、各校の特色化が進む一方、学習の深まりの保証、評価の妥当性、外部連携の質などに関して課題も指摘され、2017年告示の新学習指導要領は、高等学校に限って本領域を「総合的な探究の時間」と改称し、2022年度入学生から学年進行で実施した。

この改称にあたり、各高校では、「探究」という視点での授業設計が必要となり、その視点を模索する必要があった。

ここで取り上げる東京成徳大学深谷高校においても、従来型の「総合的な学習」からの転換を図

るにあたり、どのようにそれを生徒たちに主体性を持たせ、なおかつ私立高校として特色ある内容として実施するか？という課題についての解決を模索していた。

そこで本稿は、それらの課題解決のために、2023年からその内容について検討をし、2024年度より実施している「SEITOKU探究」の実践を報告することを目的とする。

そこで本稿は以下の内容によって構成する。

まず第2章で「総合的な探究」の時間にPBL型授業を導入した背景について、カリキュラム内容の設計を担当した柴沼が報告をし、第3章では教務主任としてカリキュラム内容全般の具体的な実施のためのマネジメントについて高柳が報告をする。さらに第4章では実際の教科担当責任者として、生徒への具体的な指導及び担当教員間の連携について青木が報告を行う。第5章に小括として柴沼が、本実践における今後の課題などについて

述べる。

2. 「総合的な探究の時間」におけるPBL型授業導入について

2.1 導入構想の背景

「総合的な探究の時間」では、学習指導要領で「目標を実現するにふさわしい探究課題については、地域や学校の実態、生徒の特性等に応じて、例えば、国際理解、情報、環境、福祉・健康などの現代的な諸課題に対応する横断的・総合的な課題、地域や学校の特色に応じた課題、生徒の興味・関心に基づく課題、職業や自己の進路に関する課題などを踏まえて設定すること」と定められているとおり、「地域の実態」をふまえた上で、「地域の課題」を探究することが求められている。

その視点に立つと、特に人口の減少と一極集中および少子高齢化が進む現代の日本社会においては、首都圏から離れれば離れるほど、その影響を大きく受けやすい地域が多くみられ、それらの地域では解決すべき課題が山積している。

それぞれの地域においては、その地域が育んできた文脈の中での地域らしさが存在をする。それゆえ社会環境的な影響によってその地域らしさが十分に発揮されないまま地域社会が衰退していくことは、平成30年告示の学習指導要領が、改訂のポイントにおいて定めた「伝統や文化に関する教育の充実」が、十分に実施できなくなってしまう可能性につながる。

そのような背景の中で、「総合的な探究の時間」においては、「生徒や学校、地域の実態等に応じて、生徒が探究の見方・考え方を働かせ、教科・科目等の枠を超えた横断的・総合的な学習や生徒の興味・関心等に基づく学習を行うなど創意工夫を生かした教育活動の充実を図ること。」が求められている。それゆえ、地域課題の解決方法を模索することは、同時間が求める内容と大きく

合致するといえる。

2.2 「SEITOKU探究」の導入

上記のような背景の中で、埼玉県深谷市に位置する東京成徳大学深谷高校は、顕在化してきた地域課題を探究学習の題材にしやすい状況にあった。

そこで、2023年の8月に、2024年度の地域課題解決型PBLを「総合的な探究の時間」の内容の中心に据えることが本稿筆者3名および同校校長の間で協議の上決定した。

カリキュラムを設計する際に特に留意した点について以下記していく。

【地域課題について生の声を聴く】

同時間内で、地域課題について生徒たちが主体的に意識でき、それを課題として顕在化することができるよう、深谷市の行政当局からのヒアリングを生徒たち自身が聞ける時間を設定した。

【地域課題を深める視点について専門家の意見を聴く】

探究活動を実施するにあたり、インターネットの情報を検索するだけで地域課題の解決方法を模索することは、必ずしも生徒たちの学びの深まりにつながらないと考え、それらの問題について生徒たち自身の生活経験にとってリアリティを感じられたり、生徒たちの現実社会とのつながり（relativity＝リラティビティ）を具体性にイメージすることができるように、それらの課題について専門的な観点で生徒たちに伝えられるような専門家を城西大学で手配することにした。

【探究のプロセスを目標管理型で提示】

高校生は今までの学校生活の中では、探究的な活動をどのようなプロセスで行うかを学ぶ機会が多くはなく、学習指導要領が求める「探究の過程においては、他者と協働して課題を解決しようとする学習活動や、言語により分析し、まとめたり表現したりするなどの学習活動が行われるように

すること。その際、例えば、比較する、分類する、関連付けるなどの考えるための技法が自在に活用されるようにすること。」や「自然体験や就業体験活動、ボランティア活動などの社会体験、ものづくり、生産活動などの体験活動、観察・実験・実習、調査・研究、発表や討論などの学習活動を積極的に取り入れること。」といった内容が、十分に発揮できない可能性があったため、各回の到達目標を設定する目標管理型になるよう授業を構成した。

【批判的なアドバイスの活用】

自分たちの探究している課題の解決方法について、批判的なアドバイスを先に講義を受けた大学教員から受けることによって、探究の方向性を見直し、さらによりよい方向を探究する機会を設定した。その機会を設定することで、探究する視点を拡大することを意識づけた。

【発表会の設定と外部評価者の導入】

探究の成果が、単なる「調べ学習」の時間ではなく、探究活動としてより深化したものになり、なおかつその内容について他者に対して伝えることを目的とし、またその評価により自らの探究内容について見直すために、学校外部からの評価者を加えた発表会を設定した。

このような視点で設計したカリキュラムを具体的にどのように運営したかについて、第3章ではカリキュラム実施全体のマネジメントを担当した教務主任より報告したい。

3. 「SEITOKU探究」について

3.1 五里霧中、暗中模索、試行錯誤、四苦八苦…

総合的な学習の時間に対する本校の状況を一言で表すとすると、このような言葉が浮かんでくる。いや、このような言葉しか思い浮かばないと

いうのが正直なところだ。それは「総合的な探究の時間（以下総合探究）」に変わっても、続いていた。1年次は進路学習が定着していた（本校ではベネッセの進路サポートを活用して探究学習を行っている）が、問題は2年次であった。業者が用意した探究ワークやプログラムをいくつか導入してみたが、思うような成果を出せずにいた。そんな中で出会ったのが城西大学の探究学習ガイドブックであった。本校校長の石川が一目見て気に入る、すぐさま筆者を呼びつけ、「このプログラム、すごくいいので是非やってみようよ」。その場で城西大学経営学部副学部長・柴沼真先生を紹介された。「当然やるでしょ」という校長から放たれる空気に当惑したが、柴沼真先生のお人柄と熱意、そして城西大学の探究プログラムの充実した内容に惹きつけられ、やってみようと重い腰をあげたのだった。新しい探究プロジェクトはこんな経緯からスタートした。

3.2 「SEITOKU探究」をどのようにすすめたか

【地域課題解決型で行く】

総合探究でしばしば耳にするものの一つが地域課題解決型の学習である。「SEITOKU探究」もそうした方向で進めることとした。理由は次のとおりである。

- ・総合探究が「地域や社会との関わりを重視する」（高等学校学習指導要領）ものであること。
- ・生徒にとって身近で取り組みやすさがあること。
- ・指導事例が多くあること。

地域課題解決と、城西大学の探究学習プログラムをつなぎあわせれば形になるのではないかと考えた。城西大学のプログラムに沿えば、お力添えをいただくことができるので、安心感もあった。特に、実際に生徒を指導する担任は、探究学習の指導（協働的・自主的な活動の指導）につい

での経験が乏しいので、道標があると大変助かるのである。筆者自身、教師という立場でプレゼンする機会は多くなく、学生時代にはもちろんやったことはない。したがって、筆者も含め教員もサポートしてもらえというのは大変ありがたいことであった。

3.3 基本方針とおおまかなスケジュールを決める

高等学校教育改革推進事業にあるように、総合探究は「高等学校が自治体、高等教育機関、産業界等との協働によりコンソーシアムを構築し、地域課題の解決等の探究的な学びを実現する取組を推進」されている。この指針に沿い、「SEITOKU探究」の方針を固めた。

①高等教育機関である城西大学の探究プログラムの研究内容をいくつか選択し、ご協力いただける先生方のご指導を仰ぐ。

②深谷市が抱える諸課題を、深谷市役所等から複数提示してもらい、その内容を調査するとともに、問題解決に向け、どのような取り組みができるか具体的に検討し、プレゼンの形で提案する。提案されたものについては深谷市役所等に評価してもらおう。具体化できるものはなんらかの形で市民に向けて発表する。

上記の①②をふまえ、年間でSEITOKU探究にあてられる時間数と柴沼先生からのアドバイスをもとに、スケジュールの大枠を次のように決めた。

- 1 オリエンテーション(探究の意義など)
- 2 目標・テーマの設定
- 3 テーマ探究の方法技術
- 4・5 テーマの客観的状況分析
- 6・7 アイディアの整理
- 8・9 プレゼンの作成
- 10 プレゼンコンペ

3.4 テーマを決める

深谷市の課題解決に取り組むには深谷市の課題を知っておく必要があり、また深谷市の協力も必要との判断から深谷市企画財政課と連絡をとり、深谷市の課題等について講演をお願いすることになった。また企画財政課との協議の中で、第2次深谷市総合計画の存在を知り、その計画に則って「SEITOKU探究」を進めることにした。そして第2次深谷市総合計画にあがっている課題の中で生徒の探究活動に取り上げやすそうなものをピックアップし、それと城西大学の探究プログラムとつなげることができるものをテーマとすることにした。また柴沼先生のご尽力により、三名の先生にもご協力いただくことになった。

なお、生徒がそれぞれのテーマをより把握しやすくするため、後日、サブタイトルをつけ、提示した。

3.5 スケジュールを決める

クラスでの探究活動を始める前に、いくつかの講演を企画した。

①探究活動の意義についてのオリエンテーション(柴沼先生)

②深谷市総合計画の概要と深谷市の課題と取り組み(深谷市企画財政課)

③テーマ別ガイダンス(城西大学石倉先生・柴沼先生・鈴木先生・伊東先生)

また、スケジュール作成には以下の点について考慮した。

ア 生徒の探究活動ができる日をピックアップする。

イ 夏期休業中に城西大学の先生方に生徒の作成したスライド等についてアドバイスをいただく。

ウ 本校の修学旅行は2月実施であり、且つ1月に入試等もあることから、2学期に終わらせる。

エ テーマ別発表会を実施し、それぞれのテーマで最も良かった班に全体会で発表させる。

それらを踏まえ、以下のようなスケジュールで進めることとした。

④スライドづくり 1

⑤城西大学の先生によるスライドチェックとアドバイス

⑥スライドづくり 2

⑦部門別発表会（それぞれの部門の生徒全員と担当する本校教員による投票で順位を決め、1位の班は全体発表会に出場する）

⑧全体発表会

スライドづくりには、城西大学の鈴木先生からフォーマットを送っていただいたので、それを全クラスに配布した。フォーマットのおかげで、スライドづくりはこちらが思っていたよりスムーズに進めることができた。生徒はもちろんだが、クラス担任にとっても「型」があることは指導する上での安心材料となった。またクラスごとの差異が生じないという点で非常に有効であった。

3.6 「SEITOKU探究」で身につけさせたい力

当初考えていたのは、「大学入試や進学後におこなわれるプレゼンテーションに対応できる力を身につける」というものであった。昨今、大学の総合型選抜入試においてプレゼンテーションをおこなう大学が増えていることや、ある大学の先生から「プレゼンや共同作業に慣れている生徒とそうでない生徒の差が大きく苦慮している」と伺ったことに起因している。（本校の生徒はもちろん「そうでない生徒」の方である。）だが、今回の探究活動においては生徒に実際に考えさせ、それに基づいて進めた方がよいという石川校長の助言を受け、令和6年4月22日、「探究学習の意義と進め方」について柴沼真先生に講義していただいた後、「どんな『ちから』を養いたいか」というアンケートを生徒たちに書かせた。生徒たちから

は次のような回答が寄せられた。

- ・ 将来を見通し、さまざまな視点で考える力をつけたい
- ・ いろいろな方向から物事をみられる力
- ・ コミュニケーション能力
- ・ 人とコミュニケーションをとりながら、自分の考えをしっかりとつたえていきたい
- ・ 自分の考えをもち、それを行動にうつすことのできる力
- ・ 自分の言葉に自信を持てる力をつけたいと思いました。そのためにも積極的に発信することを意識して生活したい。

これらの言葉は、おおよそ以下の三つにまとめることができた。

- ①主体的に学ぶ力
- ②協働して学ぶ力
- ③考えを発信し行動する力

この三つをまとめた力を「成徳力」と名付け、「SEITOKU探究」で身につけるべき力と規定した。

3.7 生徒に発表させて見えたこと

【部門別発表会を実施して】

スライドの内容はもちろん大事であり、その中身こそが探究活動の核ではあるが、部門ごとに発表させてみて、いかに発表のしかた、見せ方が大事であるかを痛感した。逆にいうと発表のしかたについての指示や指導が不徹底であり、発表練習の時間も十分でなかったことが露呈したのであった。

部門別発表会を実施して気付いたことは以下の点である。

- ①何を言っているのかわからない。教室で実施したためマイクがなく、そのため声量がある程度ないと内容を聞きとれないのである。しかも女子生徒の多くがマスクをつけていたため、なおさら発表内容が伝わってこなかった。

②下を向いて原稿をひたすら読んでいるため、アピールしているという感じがしない。

③見ている人に伝える工夫が足りない。説明文をそのままスライドに載せている班があったが、それはあくまでも自分が間違えずに原稿を読むための工夫であり、見ている側に見やすく、わかりやすくするための工夫にはなっていなかった。

そこで、全体会実施前に発表する班を集め、簡単に発表のしかたについてレクチャーした。といっても全体会まであまり期間がなかったのも、本当にすぐにできそうなことだけである。

①手を動かすこと。画面を指さすだけでもよい。動きがあることでメリハリがつく。

②顔をあげること。たとえば説明の最初と最後だけでもよい。棒読みしていることが観ている側にはっきり伝わることは発表の上でマイナスである。できれば説明文それぞれの一文の最後に前を向いてみよう。「思います」「…です」くらい見ないでも言えるはずだ。

また発表会の前々日に再度集め、リハーサルをおこなった。リハーサルといっても時間の都合で最初の5分だけであり、全員の生徒ができた訳ではないが、本番を意識させたことはよかったように思う。この時、前回のアドバイスを素直に聞き入れ、手を動かす生徒や顔を上げようという意識を持つ生徒が少しだけいたので、大いに褒めた。正直に言うと、全体の前で発表することを生徒は嫌がるのではないかと心配していたが、少なくともそういうそぶりはなく、がんばろうという気持ちを表に出す生徒もいて、とても心強く思ったこともここに付記しておく。

【全体発表会を実施して】

全体発表会は第2学年のみで実施した。当該学年以外はあまり興味をもたないのではないかと考えたからだ。ただし、参観した1学年担当の先生からは、1年生の生徒に次年度は自分たちがやるのだという意識を持たせることになるし、その発

表の様子は参考となり、お手本となるので見せたかった、という声もあった。これは全体発表会比较的うまくいったことの証左になったように思う。

全体発表会には8班が出場した。実は6つのテーマの優勝班は、二つのクラスに偏っていた。第2学年7クラスのうち、各テーマの優勝班は、特進Sコース2，進学選抜Sコース4であり、学習成績のよい2クラスが独占する形となってしまった。全体発表会を運営する上で、これは決して好ましい状況ではない。そこで以下のような工夫をした。

①幸い、出場班が多かったテーマの2位が進学選抜コースと進学コースだったので、この二つを全体発表会出場班に加えることとした。

②各班の発表が終わったあと、見た生徒の中から1名を選出し、感想を述べてもらった。（これは発表班へのご褒美的な意味合いもある。）もちろん、どの班の時にどのクラスの生徒に発表してもらうか決めておき、クラス担任にはあらかじめ人選をしておいてもらった。

③優勝班の予想を全員にさせた。生徒の投票によって順位を決めなかった理由は後で述べる。優勝班を予想した生徒の中から担任に抽選してもらい、「予想的中賞」として深谷のお菓子を配布した。

採点は生徒ではなく、「大人」にさせていただいた。城西大学の柴沼先生や本校校長の石川，第二学年主任に加え、当日参観に来ていただいたベネッセコーポレーションの方と城西大学に研修に来ていた公立高校の先生の計5人をお願いした。

（深谷市役所の方も呼びしたが、都合のため参加いただけなかった。）生徒の投票にしなかった理由は以下の二つである。

①プレゼンの内容を十分に吟味して順位を決めたかったこと。提案に説得力があるかどうか、「大人の目線」に耐えうるかどうかを大事である

うと考えた。

②集計に時間がかかること。(会場はwi-fi環境が整っていない。)後日発表するということもできるが、その場で表彰した方がよいと判断した。

表彰は、最優秀賞、優秀賞に加え、校長賞、敢闘賞、奨励賞をつくり、全班を表彰対象とした。最優秀賞には深谷通貨ネギー1人1000円分、その他の賞は深谷の名物のお菓子を副賞としてつけ、奮闘をねぎらった。

3.8 次年度に向けて

この探究活動を継続且つ発展させるために、以下のことが課題である。

①本校のようにコース制をとっている学校は、クラスによる学力差が大きい。従って、全体会を実施するなら、全クラスが出場できるようにする、もしくはコース間の差が現れないような形にする必要がある。学力差がそのまま結果に表れるような行事ではおもしろくない。

②発表の仕方について指導する。指導といっても基本的なことだけでよい。「できるだけ前を向いて話す」「教室の後ろに届く声をだす」。この二つができるだけでも印象は大きく変わると思う。

③インターネット上の情報だけでなく、自らの目で見て、耳で聞いて、触ってみて得る情報も取り入れられると、提案が「他人事」にならなくなる。そして発表に「個性」が出る。希望する班だけならそれほど難しくはないが、学年全員を動かすとなるとその調整が大変になるだろうが、ぜひやってみたいことではある。

3.9 活動全体を通じたまとめ

全体発表会を見た方々から、思っていた以上に賛辞をいただいた。筆者自身、生徒たちが顔をあげ、はきはきと発表している姿に、そして見ている側の生徒たちの態度に、この活動の手ごたえを

感じた。

また、城西大学の探究学習ガイドブックの存在が、本当に心強かったことも最後に付記しておく。

このような、教務主任のマネジメントのもとで、具体的に現場の教員はどのように動いていたのか。

次章では、教科担当者より報告したい。

4. 「SEITOKU探究」実施運営上の報告と今後に向けた課題について

4.1 「SEITOKU探究」について

「SEITOKU探究」は2024年度より開始した本校独自の取り組みである。第2学年の生徒が各クラス内で最大6つのテーマに分かれ、それぞれのテーマに関する課題を発見し解決法を話し合いスライドにまとめ、発表を行った。テーマは以下の6つである。

- 1：深谷市のPR
- 2：高齢者の健康対策
- 3：安心できる街づくり
- 4：外国人サービス
- 5：スポーツで子育て支援
- 6：特産野菜活用

4.2 クラス運営で大切にしたこと

今回の「SEITOKU探究」において筆者が一番大切にすることは、「生徒の自主性」だ。教員が助言を行い正解に導くことは日々の授業においては簡単なことである。しかし、探究活動は生徒にしか思いつかない、生徒ならではの考えを自由に発言してもらうことに大きな意味があると思う。未来を担う生徒たちが深谷市をより良い街にするために、柔軟な発想で話し合うことが、「総合的な探究の時間」の本質であると筆者は考える。

4.3 実施運営報告

【生徒の取り組み方】

実施した学年の雰囲気はとても明るく、何事にも前向きに取り組むことができる生徒たちである。しかし、「SEITOKU探究」を始めるときは、生徒たちが楽しんでくれるのか、どこまで真剣に話し合ってくれるのか不安要素も多かった。その中で、筆者たちの想像以上に生徒たちの取り組み方は素晴らしく、お互いに意見交換しながら独自の発想力を見せてくれた生徒たちには感謝したい。

【話し合いの進め方】

冒頭でも「生徒の自主性」を大切にしていたと話したように、基本的には生徒主導で自由に話し合いを行った。黒板にマインドマップを書く班もあれば、共有のスプレッドシートにそれぞれが意見を書く班など、話し合いの進め方は様々であった。各班が自由に進めるなか、全体の共通認識は「Googleスライド」にまとめることである。スライドを作る際は、文字だけでなく図表やイラスト、写真などを合わせることで、参考文献があれば必ず記載すること。このルールの中で「SEITOKU探究」を進めた。

【教員からの助言】

教員からの助言は最低限にとどめ、生徒の意見を尊重することを大切にしたい。しかし、自由度が高いことで行き過ぎた表現や現実不可能なアイデアも中にはある。そのため、各班のスライドを担当教員と共有することで進行具合を把握するとともに、適切な表現に適宜直すように心がけた。

助言は最低限にとどめるが、当然話が進まない瞬間もあった。その際は、「他県での取り組みを調べてみたら?」、「家に帰ったら家族に意見を聞いてみよう」などの声がけを行った。他県の取り組みに目を向けることで、自分たちでは思いつかない発想にも辿りつき、得た知識を自分なりにアレンジしてスライドにまとめていた。また、保護

者に意見を求めることで、自分だけでなく家族や友人、地域住民など、様々な人への配慮が必要なることに気がついていった。

【発表について】

この「SEITOKU探究」では、スライドにまとめ全体の前で発表をすることが目的の一つであった。最終発表は12月であったが、7月頃にクラス内で発表の場を設け、流れや発表の仕方について確認を行った。1年次から各教科の授業で発表を行う機会があったため、人前で話すことに対しての抵抗は少ないように感じた。しかし、スライドを用いての発表やグループでの発表は経験が浅く、スライドに書いてあることを話すだけの班や、声が小さく聞き取りづらい班など、改善点は多かった。また、それぞれの発表に対して生徒に感想を求めた。その中で特に出た意見の一つが、「自分もそうだが、ただ話しているのを聞いているだけでは興味を持っていない」というものだった。この意見に対して、「スライドに書いてあることをただ読むのではなく、話す内容を事前にまとめ、身振り手振りを交えながら話すこと。これが聞き手に興味を持たせる発表だね」と生徒に伝え、生徒は頷いていた。こうした気づきから自分たちの発表を見直し、様々な工夫を凝らし、12月の全体発表では素晴らしい発表をしてくれた。

【生徒の感想】

12月の発表後、生徒たちに感想を聞いてみた。以下はその一例である。

「自分では思いつかない発想に触れることができ、自分の中での価値観が広がった」

「人前で話すことは苦手だったけど、何回か発表の練習をしているうちに上手く話せるようになり自分に自信が持てた」

「自分たちが考えた特産野菜を活用したメニューを家で作ってみたらとても美味しかった」

このように「SEITOKU探究」を通じて、何かしらの影響を生徒に与えているのは間違いない。

非常に前向きな感想が聞けて、私としても非常に安心した。

4.4 「SEITOKU探究」の今後の課題

【テーマについて】

今回の「SEITOKU探究」では、クラス内に最大6つのテーマが存在し、正直なところ教員も困惑していた。助言は最低限だが、何も助言しないわけにはいかない。テーマの数が増えるにつれて、教員の負担も多くなるのはもちろん、担当教員のこれまでの経験や知識量によっても助言の幅は変わってきてしまう。そのため、クラス内では最大2つのテーマとし、担当教員はそれらについて事前に調べることが大切であると感じた。

また、新しいテーマの補充も重要な課題である。毎年同じ課題の方が教員の負担も減るが、様々な問題に目を向けテーマ化することも重要である。「SEITOKU探究」では「深谷市の活性化」を大きなテーマとしているため、毎年深谷市の実情に合わせたテーマを決めることが求められているのではないかな。

【情報収集の方法について】

今後の課題として、情報収集の方法もあげられる。今回は主に、インターネットを活用し多くの情報を集め、信憑性を確認しながらスライドにまとめた。しかし、インターネットだけでは最新の情報を得られるとは限らず、インターネット上の情報がすべて正しいものであるとも限らない。新しい施設を考案するのであれば、地域住民や利用者数の多い年代に直接意見を求めることも非常に重要である。そのため、今後の「SEITOKU探究」では、「現地を訪れる」ことが必要不可欠である。自分たちのテーマに適した場所に足を運び、利用者などの素直な意見を取り入れることでスライドの内容も濃いものとなる。また、調査をする中でコミュニケーション力やマナー、礼儀といった社会で重要視されている能力を養うことに

も繋がる。ただスライドをまとめるのではなく、教育活動の一環であることを念頭に置きながら「SEITOKU探究」を続けていくことが望ましいだろう。

【最終目標について】

「SEITOKU探究」では、「スライドにまとめて発表すること」を目標として掲げている。スライドを発表して満足感・達成感を得られることは、生徒の感想を聞いて明白である。しかし、他校の事例では実際に生徒が考えた解決法や食品を実行・実現している学校もある。本校としても発表して終わりにするのではなく、実際に作ってみる、実行してみることが今後は必要であると感じた。

また、動画制作も面白いと感じた。スライドにまとめることは他の教科でも実施していることであり、よくあることだ。その点、動画を制作する機会はそう多くはない。だからこそ、生徒に新しい気付きを与える良い取り組みであると感じる。特に、テーマの1つである「深谷市のPR」には適した方法であるため、今後の活動の中で実施できたらと考えている。

4.5 おわりに

「SEITOKU探究」は本校、そして、私自身としても新しい取り組みであった。レールのない道を進む活動のため大きな不安があったが、生徒や教員の協力もあり、無事に1回目の「SEITOKU探究」を終えることができた。生徒の新たな一面を知る機会にもなり、非常に有意義な活動であった。これから10年、20年と「SEITOKU探究」が続けられるよう、筆者自身も生徒とともに学び続けていきたい。

5. まとめ

以上が、2024年度よりはじまった「SEITOKU探究」の実践報告である。

第3章に指摘したとおり、「総合的な探究の時間」について、特にその授業運営・授業方法については、現場の教員にまだまだ十分な知識や経験について蓄積があるとは言えず、それらを補完する意味でも大学などとの連携は非常に効果的であると考えている。

この実践報告は2024年度のものであるが、2025年度の実施に当たっても、少しずつ改良を加えている。今後ある程度の実践の蓄積がみられたのちに教育学的な観点からの分析を行っていきたい。

謝辞

本稿を執筆するにあたり下記の方の多大なご協力をいただきましたことをここに記し、深く感謝の意を表します。

城西大学

経営学部 石倉恵介先生

経営学部 鈴木一生先生

薬学部 医療栄養学科 伊東順太先生

上記の先生方には「SEITOKU探究」実施に当たり、専門的な知見からの講義と生徒たちが作成した中間発表用のスライドにコメントをいただきました。

引用文献

文部科学省編「総合的な探究の時間」『平成30年告示高等学校学習指導要領』475－478頁 所収

参考文献・Website

文部科学省編（2023）『「総合的な探究の時間」の展開－未来社会を切り拓く確かな資質・能力の育成に向けた探究の充実とカリキュラム・マネジメントの実現』。

文部科学省Website「地域との協働による高等学校教育改革の推進」

(https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kaikaku/1407659.htm) 2025年8月参照。

Implementing the “Period for Inquiry-Based Cross-Disciplinary Study” through High School-University Collaboration - Practice of “SEITOKU TANKYU”

Makoto Shibamura, Kenzo Takayanagi, Ryo Aoki

Abstract

Beginning in the 2024 academic year, Tokyo Seitoku University Fukaya High School substantially revised the curriculum of its “Period for Inquiry-Based Cross-Disciplinary Study.” Rebranded “SEITOKU TANKYU,” the program adopts project-based learning focused on solving regional issues. At the culminating showcase, student outputs exceeded faculty expectations in depth of inquiry, quality of evidence, and relevance for community stakeholders.

This paper documents the reform from three coordinated perspectives. First, the curriculum designer framed the aims, competencies, and success criteria, aligning them with the intent of the statutory inquiry period. Second, the head of academic affairs orchestrated implementation: timetable integration, formative and summative assessment alignment, and allocation of staff and external resources. Third, the subject-area lead managed day-to-day collaboration among classroom instructors and external partners, supporting consistent guidance while allowing disciplinary variation.

We outline the design logic, drawing on backward design and inquiry cycles; the management mechanisms that enabled cross-teacher coordination; and challenges encountered, including workload balance, assessment reliability, and access to authentic data. Evidence from student artifacts and reflections indicates gains in problem framing, data collection, and stakeholder communication, alongside heightened motivation. The case offers practical guidance for schools seeking to embed PBL within Japan’s inquiry period while maintaining coherence and feasibility.

Key words: Period for Integrated Studies, Community-Based Project-Based Learning (PBL), Curriculum Development for the Period for Integrated Studies through High School-University Collaboration, Instructional Management of the Period for Integrated Studies